





優秀賞〈銀の星賞〉

『金色の思い出―座敷わらしに会った秋―』

東京都 白百合学園高等学校三年 吉武 英莉

俺われはあんまりおしゃべりじゃない。遊びにも「一緒にいれて」って言い出せない。見ているだけだ。誰も俺の事を気に止めない。透明人間の様に扱われる学校が嫌いだった。

俺のクラスには東京から来た原田という奴やつが居た。いつも胸のポケットにピカピカ光るハーモニカを入れていた。ある日、原田の父から貰ったという外国の本のページが破られる事件が起きた。原田とその友達たちは

「祐介、破ったのお前じゃろう」  
と俺を犯人扱いした。「俺じゃない」そう言いたかったが、言い返そうとしても俺の顔はみるみる赤くなり何も言えなくなった。

「……ちがう……。……ちがう……。……」  
と小さな声でそう言うのが精一杯だった。

その次の日から俺は学校を休んだ。両親は何度もその理由を聞いたが俺は黙っていた。

「黙っていたら何もわからないよ」  
父さんはそう言った。でも俺は黙っていた。

「今は駄目なのかも。祐介が自分から語ってくれるまで辛くても私達は待ちましよう」

母さんは父さんにそう言った。そして、俺のことを真っ直ぐに見てこう言った。

「何があっても父さんと母さんは祐介の味方だからね。それだけは、忘れないでね」

学校を休んで暇を持て余した俺は近くで一人暮らしをするばあちゃんの家遊びに行った。百年以上もたつ古い大きな家だ。

「あく祐介かい。ばたもち食べておいき」



俺が行くとはあちゃんは薄暗い奥の部屋からゆっくりと出て来てそう言った。

「ありや、ないぞ。どこ行ったかね〜」

「ばあちゃんはそう言っただけで戸棚の中を探した。」

「こりや座敷わらしに食われちゃったな」

「えっ？ 何それ？」

「ありや？ 祐介、座敷わらしを知らんのかい？ 昔、食べ物が無かった頃、

口減らしで、生まれて来ても生きて行く事が出来なかった子供の……まあ、

お化けのようなものじゃけど、悪さはしないけん。座敷わらしを見た人は出

世しての、幸せになる、と言われとるな」

「……ばあちゃん、見たことあるのか？」

「いいや。そうゆう話さ。うちの様な古い家には住んどるかもな。でも、何

かの拍子に居なくなる時もあるらしいな。そんな時座敷わらしは、さよならを

言う代わりに赤いちゃんちゃんこを着て去って行くと言われとるな」

とばあちゃんは言った。ある秋の夕方、縁側に座ってぼたもちを食べている

と、小さな男の子がこっちを見ているのに気が付いた。

「……だれ？ お前だれ？」

と尋ねると、

「おまえ、にげないのか？」

奴は小さな声でそう言った。丁度その時、奥からはあちゃんが現れた。

「ばあちゃん、子供がさ、迷子になって家の庭にまぎれて来ちゃったみたい

なんだ」

そう言って振り向くと、もう誰も居なかった。大きな銀杏いちようの木が黄金の葉

を落としていた。

「何言っているんだい。今まではあちゃんは家の前で立ち話をしとったけん、

誰か入ったら分かるさ。狐きつねにでもつままれたか？」

「ばあちゃんは笑いながら家の奥に入って行った。あれは誰だったんだろう。

ひよっとしてあれが座敷わらしというものなのだろうか。」

俺は次の日また縁側に座って奴を待った。

「やっぱりただの迷子だったのかも……」



そう思い出した時だった。出たのだ、奴が。ばあちゃんの家で飼っている犬のシロの背中に抱きついて楽しそうに「きゃはは」と笑っていた。怖い思いは吹っ飛んだ。俺は、

「お前、誰だ？」

と言った。すると奴も可愛い声で答えた。

「おまえ、だれら？」

「お、おれは祐介だ」

俺はお化けに自己紹介してしまった。

「ゆーっけ？」

「ゆーっけじゃないよ。ゆ、う、す、け」

「ゆ、ゆ、ゆ、け」

俺はもう“ゆーっけ”でいいや、と思った。

「ゆーっけ、あしょぼ」

俺は犬の背中に乗った変なチビのお化けに誘われてしまった。

「あ、じゃあキャッチボールやるか？」

俺はぼーんとボールを投げた。奴はシロの背中に乗ったまま、上手にボールを取って投げ返してきた。学校では見てばかりでやった事なんてなかったからとっても楽しかった。夕日はゆっくりと山の間<sup>ま</sup>に沈もうとしていた。

「お前、この家に住んでいるのか？」

俺が聞くと、奴は銀杏の木を指で指した。

「そっか、木が家なのか……。お前座敷<sup>ざしき</sup>わらしっていうんだろ？ 名前は何ていうんだ？」

俺がそう聞くと奴は消えそうな声で答えた。

「……ない。なまえ、ない」

そうか……。間引かれた子供が名前なんて付けて貰えるわけないな……。

「じゃさ、名前をつけてやるよ。……ふうちゃん！ 風ちゃんはどくだい？」

「ふうちゃん？」

「そう、お前風みたいになむわくつとやって来るだろう。だから、風ちゃんだ！」

風ちゃんは嬉しそうにこっくりと頷いた。

「風ちゃん、明日も遊ぼうぜ」



風ちゃんにはっこり微笑<sup>ほほえ</sup>み顔き、銀杏の木の中に消えて行った。その時はあちゃんの

「祐介、今日はシロと楽しそうに遊んどったね。学校でも遊べるといいんじゃないけど……」

と言う声があった。ばあちゃんには風ちゃんが見えないらしい。俺は、親に命を奪われるって、親に捨てられ名前さえも持っていないって、どんなに辛いことかな、と思った。俺は祐介って名前を付けてもらえた事、大切に育てて貰っている事を今まで全部当たり前だと気にもとめなかった。でも本当はとても大切で感謝しなければいけない事なんだな、と思った。

次の日、俺がばあちゃんの家の縁側に立つと風ちゃんはシロに乗って現れた。

「ゆーっけ、あしよぼ」

「よーし、今日はかくれんぼをしようぜ」

俺達は一日中一緒に遊んだ。毎回鬼は俺だ。風ちゃんにはかくれんぼじゃ勝てない。消えちゃう奴なんか探せやしない。風ちゃんを見つけ出せず焦る俺の背中を指でトントンとする風ちゃんは嬉しそうだった。俺達は毎日一緒に遊んだ。縁側に立って「おーい」と叫ぶと向こうの山にこだまする。すると風ちゃんはシロに抱きついて乗りながら現れた。

「何でいつもシロに抱きついて乗るの？」

俺が尋ねるとシロの毛を小さな手で撫<sup>な</sup>でて、

「シロ、おかあちゃん」

と風ちゃんは言った。シロの温もりに、お母さんを求めているんだ……。風ちゃんの気持ちを思うと俺は胸が張り裂けそうだった。

風ちゃんは川遊びも好きだった。水が澄んでいて簡単に魚が取れるのに、風ちゃんは、

「ゆーっけ、ダメ。しゃかな、ダメ」

と首を横に振った。風ちゃんは魚と遊ぶけど魚の命を奪ったり、魚を住<sup>すみか</sup>から連れ出す事はダメだと言った。風ちゃん自身がその悲しさをよく知っていたからなのだろう。俺と風ちゃんは川に入って二人でアハハハと笑いながら魚を追いかけては転び、水を頭からかぶってキャーキャーと笑った。風ちゃん



んは疲れると丸まって寝ているシロの脇で抱かれる様にコロソと寝転んで眠った。まるで犬の親子の様だった。ある日、風ちゃんは「ゆーっけ、がっこ、いかないの?」

と聞いた。学校で友達が居ない事、破れた本の犯人にされてしまった事、俺は正直に話した。風ちゃんは俺の話を聞いてこう言った。

「ゆーっけ、はなせばいい」

「話せないよ。話すの苦手なんだ。恥ずかしくて真っ赤になっちゃうんだ。皆にからかわれるだろ、だから人と話すの嫌いなんだ」

風ちゃんは黙って聞いていたが、

「おなか、ちからいれて、がんばれ」

大きな目でじっと俺を見つめてそう言った。

帰ろうとした時、俺は川の草の間で何かを必死に探している原田を見つけた。そこは流れが速いのでこの辺の子供は近づかない所だった。奴に見つかるとまいと反対岸を歩いていた時だった。原田が流れに足を取られた。

「ゆーっけ、たしゅけてー!」

風ちゃんの声に、俺は夢中で川に飛び込んだ。俺は流れと戦いながら、原田を掴み、必死で川岸に泳ぎ着いた。原田はむせ返りながら、

「ありがとう。ハーモニカがなくなったんだ。お母さんが買ってくれたのに……」

と泣きじゃくった。その時俺は昔立ち聞きした話——東京で原田の母親が家を出て、父親と二人になった事、多忙な父が原田を祖母に預けてここに一人で来た事——を思い出した。

「一緒に探すよ」

俺はそう言って風ちゃんの元に戻り、説明した。風ちゃんは「ふーちゃんにまかしえろ」と言っつてシロにまたがって草むらに消えた。暫くして風ちゃんは銀色のハーモニカを掲げ、

「みちゆけたー!」

と叫んだ。泣いていた原田はきよとんととして風ちゃんを指差し、「弟?」と尋ねた。

「えっ? こいつが見えるの?」

「何言っつてんだよ。この子、誰?」



「座敷わらし」

「は!？」

風ちゃんは自分を指差して、

「ふーちゃ」

とにこにこ笑って自分の名前を言った。

「えっ? 座敷わらしって……? お化けか?」

原田は混乱してあわあわしていた。風ちゃんはもう一度大きな声でゆっくりと

「ふ、う、ちゃ」

といばって言った。俺は風ちゃんは昔、口減らしになった子供である事、名前がないので付けてあげた事、普通皆には見えない事を言った。原田は黙って聞いていたが、

「こいつも母さんに捨てられたのか……」

と小さな声で**吹きポケット**から**飴**を出した。

「ありまと」

風ちゃんはそう言って原田から飴を貰った。

「おいしいか?」

ほっぺを膨らませて風ちゃんはにっこり頷いた。俺達三人は河原の土手に座った。原田はハーモニカで夕焼け小焼けを吹き始めた。風ちゃんはじっと聞いていたが曲が終わると

「はらら、ハーモツカ、おいしい」

と言った。

「……おいしい? 上手いって言うんだぞ」

俺達は真っ赤な夕日の中でげらげらと笑った。

「そろそろ帰るか?」

俺と風ちゃんは歩き出そうとした。その時、俺の背中から原田が叫んだ。

「学校、来いよ! 祐介、学校来いよ! 俺、お前に言わなきゃいけない事がある!」

次の日、俺は原田に言われた通りに学校に行った。朝の会が始まると、原田は突然立ち上がり、ツカツカと教壇まで進み出た。



# 賢治のまちから 高校生★電話大賞

「俺、皆と祐介に言わなきゃいけない事があります。俺は自分の不注意で自分の本を破ってしまいました。怒られるのが嫌で、大人しい祐介のせいになりました。ごめんなさい」

原田は厳しい顔で一気にそう言うのと直立不動の姿で頭をぐいっと下げた。水を打ったように静かになり皆の目が一気に俺に注がれた。俺は顔がカーツと赤くなった。その時、俺は居ないはずの風ちゃんの声聞いた。

「おなか、ちからいれて、がんばれ」

俺はスーと大きく息を吸ってお腹にぎゅっと力を入れて叫んだ。「許す！」

原田は授業が終わると小声でこう言った。

「祐介、今日もあのチビと遊ぶのか？」

「風ちゃんの事？ ばあちゃんの家のお銀杏の中に居て、呼んだら出て来てくれるよ」

「一緒に行ってもいいか？ 俺、あいつの事誰にも言わないから、絶対に秘  
密守るから」

原田は神妙しんみょうな顔をして言った。二人ではあちゃんの家に行くと、ばあちゃんはずごく喜んだ。原田は丁寧ていねいに挨拶あいさつして家上がった。俺は銀杏が立つ庭の縁側に原田を案内した。

「おーい」

俺はいつもの様に呼んだ。山びこと同時に風ちゃんは銀杏の側からひよこつと顔を出し、

「あー、はららあー！」

と叫んだ。風ちゃんは嬉しそうにとことこと走り出し、ぴょんと縁側に飛び乗った。風ちゃんは原田の胸のハーモニカを指差して、

「はららあ、ふいて。それ、ふいて」

と言った。原田は、

「風すけ、お前、これ好きだなー」

と言って、夕焼け小焼けを吹き始めた。曲が終わると風ちゃんは

「もっかいー！」

とおねだりした。風ちゃんは遠くを見つめ、何度も何度も「もっかい」を繰り返した。

「風すけ！ 休憩。俺、疲れちゃったよ」



原田はそう言って縁側にボタンと寝転んだ。

「えー。はらら、おやしゅみ？」

「じゃあ、風すけが吹いてみるよ。ふうって吹くんだぞ」

と原田は言ってハーモニカを風ちゃんに手渡した。風ちゃんはハーモニカに口をつけ「ふうっ」と言った。原田は笑いながら

「ちがう、ちがう。ふうって言うんじゃなくて、ふって息を吹き込むんだ」と言った。すると風ちゃんは今度は「ふっ」と言った。

「言うんじゃなくて息を吹き込むだけ」

原田は笑いながら、でも根気よく風ちゃんに教えた。何度かすると「ピッ」と音がした。風ちゃんはびっくりして

「わあっ」

と言った。そして俺のほうをくるっと向いて

「ふうちゃん、おいしい！」

と嬉しそうに叫んだ。

「だからー、風すけ、そこはおいしいじゃなくて上手いだってばー」

と原田が言って俺達三人はアハハと笑った。でも風ちゃんはなかなか吹けないので俺は

「風ちゃん、その曲には歌があるんだぞ」

と言って夕焼け小焼けの歌を歌ってあげた。

「夕焼け小焼けで日が暮れて……」

原田はまたハーモニカを手に取って俺の歌にあわせて曲を吹いた。俺達は風ちゃんに歌を教えてやった。風ちゃんの歌は「ゆーっけ、こーっけ」になったり、「日がれくて」になったりするので、俺達はげらげら笑いながら何度も歌った。夕方になったので原田は、

「俺、もう帰らなきゃ。風すけ、またな」

といい、家の中のばあちゃんに、来た時みたいに丁寧に挨拶をして帰っていった。

「ゆーっけ、ともだちできた。よかった」

「風ちゃんのおかげだよ。風ちゃんがあの時原田を助けるって言うてくれたから、原田と友達になれたんだ。でも、風ちゃんが俺の一番大切な友達だよ」

俺がそう言うのと風ちゃんは恥ずかしそうにシ口の毛に顔をうずめた。



「俺、ずっと友達が欲しかったんだ。風ちゃんのおかげだ。ありがとう、風ちゃん」

風ちゃんは照れた様に笑った。大きな夕焼けが風ちゃんの顔を明るく照らした。

「……風ちゃんは？ 一番欲しいものは何？」

俺は風ちゃんに何気なく聞いてしまった。風ちゃんはちょっと寂しそうな顔をして、暫く黙り込んだ後、小さな声でこう言った。

「……おかあちゃん……」

俺は心臓がきゅんとなった。

「……お母さんの事を知らないんだもんな」

俺がそう言うと風ちゃんは首を横に振った。

「おかあちゃん、しってる」

と答えた。風ちゃんは銀杏の木の向こうの世界で誰が自分のお母さんなのか知っているらしかった。でも、自分が子供だと名乗れないのだろう。銀杏の向こう側で風ちゃんはどんな気持ちでお母さんを見つめているんだろう。抱いて貰う事も話をする事も出来ず、張り裂けそうな思いで遠くから見つめているのだろう、と思った。俺は鼻の奥がつーんとした。

「風ちゃん、話してみよ。自分があの時の子供だって、言ってみよ。俺に教えてくれたる？ 腹に力を入れて、話せて。大切な事は言葉にしなきゃ分からないって。勇気だせよ、話しかけてみるよ」

風ちゃんは下を向いて足をブラブラさせながら何も言わなかった。さらさら、さらさら金色の銀杏の葉が俺達の上に舞っていた。

俺が家に戻ると母さんが飛んで出て来た。

「祐介、あんた、今日、友達連れておばあちゃん家に行ったって？」

「うん」

俺はなんだか照れくさくて、そう言うだけで精一杯だった。

「よかったー。よかったねー。祐介」

母さんは俺の肩をポンポンたたいた。母さんの手は暖かくて、柔らかかくて、優しくかった。俺は、何だか黙ってちゃいけない気がした。



「母さん、ありがとう。今までいっぱい心配かけてごめん。俺、学校に行くから。毎日学校へ行くから。俺、父さんと母さんの子供に生まれてきてよかった。ありがとう。俺のことを、大切にしてくれて、ありがとう」

俺は母さんの目をしっかりと見て、そう言った。母さんの目はみるみる赤くなって、大きな涙がぼたぼたと落ちた。

その翌日もそのまた翌日も風ちゃんは現れなかった。俺と原田は毎日縁側に座って、ずっと銀杏を見つめた。いつまで待っても風ちゃんは現れなかった。

「おーい。風ちゃんー!」「風すけー!」

俺達は大きな声で叫んだ。山びこが返ってくるだけだった。それでも俺達は毎日縁側に向かった。そしてその日はやって来た。原田が縁側で銀杏の向こうの風ちゃんに聞かせる様にハーモニカを吹いていた。すると、聞き慣れた懐かしい声がした。

「ゆーっけ。はらら」

俺はパツと顔を上げた。そこには女の人の背中におんぶされた風ちゃんがいる。いた。

「風ちゃんー!」「風すけー!」

俺達は叫んだ。風ちゃんは、その体に赤いちゃんちゃんこを着ていた。

「風ちゃん、お母さんに話せたのか?」

風ちゃんは小さな頭をこくと振った。

「ゆーっけ、おかあしちゃん」

風ちゃんは嬉しそうに笑った。風ちゃんをおんぶしたまま、その女の人は俺達に向かってゆっくりと頭を下げてお辞儀をした。

「風ちゃん、良かったな。良かったな」

俺はどんどん涙声になっていた。おんぶされた風ちゃんは小さな手を振ってゆっくり、ゆっくり、消えていった。もう会えないのか? もう遊べないのか? 俺の頭の中にあるんな言葉が浮かんだ。でも、俺はお腹に力を入れて消えていく風ちゃんに向かって叫んだ。

「風ちゃん、ありがとう」

風ちゃんの赤いちゃんちゃんこは赤い夕日と混ざりあう様に静かにとけて消えていった。



「さよならー。風ちゃん、さよならー」  
「風すけー。さよならー」

俺達は大きな声で叫んだ。まるで風ちゃんの答えの様に山びこが「さよならー」と言った。金色の銀杏が、小さな手がバイバイする様にふわふわと舞い落ちていった。原田はハーモニカを取り出すと夕焼け小焼けを吹き始めた。俺はハーモニカに合わせて歌いだした。

夕焼け小焼けで 日が暮れて

山のお寺の 鐘が鳴る

お手々つないで 皆帰ろ

鳥かたがらと一緒にいっしょ帰りましょう

子供が帰った 後からは

円い大きな お月さま

小鳥が夢を 見る頃は

空にはきらきら 金の星

俺と原田はポロポロ泣きながらハーモニカを吹き、歌った。風ちゃんに届けと思いつながら、歌った。夕日は山の間で静かにゆっくりと沈んで行き、西の空には一番星が光りだした。

「きらきら光る金の星」だった。

「夕焼け小焼け」

作詞 中村 雨紅

作曲 草川 信

日本音楽著作権協会 (出) 許諾第 1416290-401